

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	宮澤隆義
論文題目	坂口安吾研究—一九三〇年代から五〇年代における展開—
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、論者がこれまで一貫して研究して来た、昭和初期から戦後まで活躍した作家坂口安吾の営為を辿りつつ、それを広大な昭和文学の世界の中でどう位置づけるか、時代との関わりはどうかをめぐって、詳細な跡づけと新たな問題提起を試みた労作である。とりわけ、時代との関わりについて詳細に分析し、安吾における「主体化」という問題を提起する。安吾はことさら「主体」ということばを用いなかったが、安吾の文学性を「主体化」という概念から整理しようという果敢な試みである。ここで言う「主体化」は、思考の変容の過程そのものの運動として考えられている。実証的なアプローチを基盤にしつつ、初期から戦後作品までを扱い、時代的に追いつつ、主要な作品についてきちんとした指摘を行っている点、安吾研究としてまとまった達成となっている。全体は、400字詰め原稿用紙換算で500枚を超える達成であるが、査読のある全国的な学会誌に寄せた多くの既発表の論文をただ集めたのではなく、全体の論旨が明確になるようになされており、「序論」「結びに」を付し、全体の構成を考えた配慮がなされている。全体は「第一章」から「第十章」に分かれており、それらが有機的に連関している。</p> <p>「序論」で、論者はまず、安吾の作品にしばしば見られる「矛盾」や「逆説」といったテーマを取り上げ、同時代の小林秀雄や中野重治の営為と比較することを通して、安吾の発想の根源を分析し、「ファルス」というテーマにおける世界の諸事象の全肯定とそこにおける認識の変容への要請を、「主体化」の運動の原動力として見なそうとする。全体の概念、方向性を明らかに示した部分である。</p> <p>「第一章・ファルスの詩学—坂口安吾と「観念」の問題」は、若き日の評論「FARCE に就て」(1932年)などを取り上げ、安吾のファルス論を扱っている。安吾の言う「観念」の概念には、絶えざる自己の変容としての運動の意味合いが含まれており、その意味で安吾にとってぜひとも必要な内実を持つとする。初期を考える有力な視点である。</p> <p>「第二章・ファルスは証言する—「風博士」論」は、ファルスの実作として書かれた初期の代表作「風博士」(1931年)の性格を分析、「僕」の語りによって言語自体の経験を際立たせる狙いがあったとする。「僕」の証言の中に、出来事の特異性や、他への還元不可能性が新たに明らかにされるプロセスが見えるとする指摘は、興味深い。</p> <p>「第三章・坂口安吾と「新しい人間」論」は、これまで論じられることの少ない「新しい性格・感情」(1933年)などのエッセイを通して、安吾が共産圏の進化論的言説に興味を示していたことを指摘する。フランスの雑誌「NRF」や当時の「唯物論研究」などの雑誌を補助線に、安吾の考えを辿るが、当時の問題作「吹雪物語」(1938年)には安吾の意図を裏切る問題につき当たった苦しさが見られるとする。そして、「ラムネ氏のこと」(1941年)において新しい認識に到達したと分析を進めている。</p> <p>「第四章・「バラック」と共同性—「日本文化私観」論」は、戦前の有名なエッセイ「日本文化私観」(1942年)を扱い、それまで個人単位の「主体化」を論じて来た安吾が、集団的な「共同性」の問題を扱っているとまとめる。ここで言う「共同性」とは、共同体を規定している歴史的社会的構造を「共同性」において変化させていくことの中にあるもので、そこに「独自性」と「主体化」の契機があると論じて行く。</p> <p>「第五章・情報戦と「真珠」」は、作品「真珠」(1942年)を取り上げ、散文としての小説とは、「情報」に囲い込まれた世界においてその文脈を散乱させ換骨奪胎してしまうという特徴を持ったものであり、「真珠」はそれを如実に体現した作品であるとした。</p> <p>「第六章・空襲と民主主義—「白痴」論」は、敗戦後の代表作「白痴」(1946年)を対象とした力編である。状況を空襲される側から描いた「白痴」を、戦後社会の問題と重ね合わせることで、民主主義なるものが常に理解不能な動物性や欲望を抱え込むことを意味しているとし、「墮落論」(同年)にも言及している。</p>	

「第七章・「思考の地盤」を掘ること―「土の中からの話」と農地改革」は、戦後安吾が農地改革に触発され、土地制度について発言した経緯を跡づけ、「土の中からの話」(1947年)を分析しつつ、各個の「主体化」は結局「土地」にまつわる社会構造を変化させることと切り離せない、と論じている。

「第八章・暴力と言葉―「ジロリの女」をめぐる」は、小説「ジロリの女」(1948年)を取り上げ、コミュニケーションと暴力の問題を論じたものである。この小説については、暴力のエコノミーから逃れて行く言語行為の可能性を探るものとして意味づけられており、主人公の手記という形式の中に、金銭や言葉の流通の中から抜け出す回路が潜んでいると考えている。

「第九章・法の切断―「桜の森の満開の下」論」は、これまで抽象的な説話としてとらえられることの多かった「桜の森の満開の下」(1947年)が、戦後の世相的なモチーフを比喩的に取り入れていることに注目し、戦後の憲法制定や諸制度の改革の問題と重ねることで、作品の新たな意味合いを見出している。

「第十章・「トリック」の存在論―「不連続殺人事件」とその周辺」は、通常は探偵小説として読解される「不連続殺人事件」(1947～1948年)の中に、戦後民主主義が単に統治の道具として機能することに無批判である風潮に対し、安吾が問題を投げかけていることを扱っている。人間の認識の構造そのものを明るみに出すことが、この作品においては「推理」という行為として描かれているとするのである。つまり、安吾における「主体化」とは、「現実」として措定される「コンテキスト」のもっともらしい論理性と明証性を備えたトリックを見破り、そこで実際に何が起きているのか、どのような不合理性をその論理が押し隠しているのかを発見する「推理」とともにあったと考えるのである。「主体化」が戦後の安吾において、どのように発展して行ったのかが問われていると言えよう。

「結語」においては、サルトルや「主体性論争」との比較を通して、「主体化」の問題を整理する。安吾の創作活動、言語活動の中には、現実と対峙しつつ、それとの衝突の中から絶えず生み出されて行くべき「主体化」の運動こそ、安吾の根本に存在するものだ、という全体の結論が、引き出されている。

全体の概略を述べたが、いくつかの問題点も散見される。「主体化」の概念を前面に出すことで、論理を駆使したダイナミックな論調が生まれたが、逆に概念が先に存在し、議論の自己展開に終始しているきらいがある。やや使われた言葉が流れた感じになり、概念自体が更新されることが少ないのである。生硬な表現もみられ、キーワードを巧みに使ってはいるものの、読者に伝わりにくいことはなかったか。「結語」でコシュマンを援用するが、うまく生かされていない。逆にその概念について最初に提示し、その「主体化」概念を、作品を論ずることで展開させた方がよかったと考えられる。今後の課題とすべき点であろう。

いくつかの問題点を指摘したが、坂口安吾の代表作に触れつつ、「主体化」概念を使って安吾の原点を解明する努力は高く評価されるべきであり、今後の安吾研究に一石を投じた達成になっていることは疑いない。そこで、本論文を、「博士(文学)」の学位を授与するにふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2011年 5月12日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	文学学術院・教授	博士(文学)早大	中島国彦
審査委員	文学学術院・教授		高橋敏夫
審査委員	政治経済学術院・教授		宗像和重
審査委員	文学学術院・教授	博士(文学)早大	十重田裕一